

文庫版『雀の卵』覚書

北原白秋

青空文庫

I 初版本について

初版『雀の卵』は大正十年八月にアルスより刊行された。四六版アンカト、五二五頁、部厚で重く、兎も角彪然たる大冊となつた。恩地孝四郎氏の装幀で、鼠色の葉囊絨布で、表紙は無地、背の上部に白の鞞を当て、之に金文字を捺しただけであつた。大扉と小扉は同じく同氏の手になるカツトで飾つた。挿画はわたくし自身で葛飾時代から描きためて置いた十七葉を以てした。

此の『雀の卵』の装幀には二種ある。再版後の分は、表は同じ鼠の無地であるが、背の鞞の金文字は自身のものに換へ大扉と小

扉も同じく之に準つた。

いづれも内容は同じであるが、ただ一首後のに訂正されてゐる。これは「雀の卵」の中「山家抄」の二、三首目の歌

雪空に澄みつつ白き山ふたつその谷たにあひ間の火繩銃の音

の第二句が「尖りて」と改まつてゐる。何版のからさうなつたかは、記憶がさだかでない。

此の文庫版は、この後のに従ひ、それまでを総じて原版と見なすことにした。以来絶版してゐたのを、今度縮刷したのである。

無論、『白秋全集』には収録した。

『雀の卵』上梓の径路に就いては、その大序に委細を尽したと思ふ故、ここに改めて書く余事も無いやうである。

歌風に就いては、現代短歌全集の『北原白秋篇』の後記に書いた二三行が簡潔に要約してゐる。

「この集に於て、歌風はまた一転した。東洋芸術の精神とするところの閑寂境に向つて、わたくしは幽かにわたくしの靈を澄徹させようとした。葛飾に居住するに至つて、愈 わたくしは自然の真相に親しむ日々を雀と楽しむやうになつた」。

昭和五年版、全集のⅤ歌集第一の後記には、此の中の三部の推移に就いて些か回顧してゐる。心境もいくらか進んで来て、自ら省みることも冷やかになつた。

「輪廻三鈔」には未だ「雲母集」の余波が輝き、「雀の卵」

に於て漸くその圏外に逃れ、心は身の落つきを思ふ朝夕と相重つて、いよいよ「葛飾閑吟集」の寂心に閑かに住しようとした。さうして『雲母集』の歌風と遠く相隔たつて了つた。

此の三部歌集『雀の卵』編纂当時は、わたくしは小田原の山荘に在つた。此処で再び推敲し、また更に新作した。此の間既に九年近くも経過して、成すところのものは僅かにこれだけのものであつた。ただ、その間にいつかしら修業の心が初めて眼を開いたやうであつた。少しづつは深めて来たであらう。

これも亦、今日にして見ると、かの大序などは氣を負ひ過ぎた。どうにか澄んでゆくやうでも、事に触れては弾む。人

間といふものはしようのないものだと思ふ。畢竟は修業未熟の為である。」

かの大序は、今にして忸怩の念を覚えしめるものであり、兎角序言で己れを語り過ぎるといふことは、世の好感を衷ひ易く、作歌そのものの吟味にさへ他の反撥を醸し易い。しかしながら、何が故にあれほどの亢奮を我と抑制し得なかつたかといふには大いなる理由があつた。

九年に亘つての苦業から贏ち得た『雀の卵』の完成は、わたくしにとつても、肉親にとつても、どうしようもない歓びであつた。天を仰いで感謝したい気持でいつぱいであつた。一家の窮乏を凌ぎ、幾多の犠牲を忍んでの結実であつただけに、刊行者としての

弟鉄雄の張りきり方も非常であつた。製本成るや、弟は礼装に身を正し、その一本を携へて、四海民蔵君を訪ひ、此の集に対する曾ての厚意を涙して感謝したものである。わたくしたち兄弟はそれほどの念慮を此の一卷に籠め、厳肅に一つ憂を頒ち、切實に一つ歡びを感じたのであつた。書肆アルスにとつては全く再び興るか否かの分れ目であつたのだ。これが為に、著者たるこの兄が鼻じろむほどの大々の広告もした。この間の機微については大方も言きびしく咎めてくださらぬであらう。

で、此の文庫版は、その原版を記念する為、後日に改作した歌もあり、又意に満たぬ個処はあつても、敢て訂正はしなかつた。

改訂本或は決定本は今後の事に属する。

II 訂正作について

本集の大序の中に、わたくしは推敲の幾多の实例として、原作と改作とを比較対照した。しかし、その後になつて、訂正完了と思へたそれらの中の歌にもまた嫌らない個処が眼につき、或作は元に還し、或作は補訂した。之等の中の幾首かは、選集編纂の場合に、改めて処理した。処理し得たつもりではあつたが、年時を経るにつれてまた完了と未了とが瞭然と判別されても来た。未了の分はまた密かな苦勞の種となつた。で、閑さへあれば、わたくしは自装の手沢本に朱を入れた。縦横に朱を入れて、これでよし

としたその後になつてまた、よしなき事にも思ひ、却て悪くして了つたことにも気づき、浅慮であつたことも省みられた。で、折りに触れては手をつけ手をつけした。さうなるとどうにも止度もなくなるものである。世の賢い人たちは、かうした未練と混乱とを、凝つて思案に能はずとか、過ぎたるは及ばざる如しとも、昔から嗤つてゐる。さもあらうと苦笑される。

此の『雀の卵』編纂の際には、一首一首を成すのに全く首の座に直る気持であつた。それでゐて、以来加筆せねばならなくなつたといふことは羞恥に堪へぬ次第ではある。これが声ならばその時かぎりであるが、なまじ文字は紙上で改め易いものであるだけ未練が出るのである。それではまた、あの節には未了のままに投

げ出したかといふに決してさうではなかつた。あの当時の自身としては精一杯の努力であり、全力を傾注し尽したものであつた。禍であつたことはただ未熟であつたといふのみが云へようか。あれ以上にはどうにもならなかつたのだ。

そこで思ふのに、文庫版『雲母集』の後記にも書いたごとく、二十年後の今日のより進んだ心境と手法とを以てして、たとひ巧慧に改め得たとしてもそれが果して真に当時の気合なり歌風なりを生かし得るであらうかである。私の勉強にはなるかもしれぬが、この道につき到り尽しての上ならば兎もあれ、年々歳々成長の道程にある分際としては容易に完了した形に於て公に発表すべきでないとも自省される。直しても直しきれないものならば寧ろ原作

のまままで諦めて置いた方がよい。

で、此の文庫版『雀の卵』は、それらの朱筆の跡には触れないことにした。ただ、既に選集の中に補訂した作品のみを、参考として左に再録するに留める。大概はよく直つたとは思ふが、過を再びしたと思へるものもある。いづれは決定版上梓の秋を俟つて、整理したいと思ふ。

『花檉』 葛飾閑吟集

野ゆき山ゆき

鳩にほどり鳥かつしかをのの葛飾小野の夕霞ねもごろあかし春もいぬらむ

(四七頁)

面おもほそり寂し吾わぎも妹も浅茅あさぢふ生の露けき朝は裾かかけけり

(四八頁)

月夜

躑躅さきしろき月夜をさぬつ鳥どりきぎす雉子とよめりこもらふらし

も (五〇頁)

雨の頃

物の葉の葉べりにむすぶ雨だりは見つつよろしも揺れまる

みつつ (五二頁)

蟹と竹

さき蟹の音かき立つる竹の縁へり見のすがすがし昼ひるい寝さめる

(五三頁)

見のすがし雨の霧^きらひやひた揺れにしぶく小竹^{ささ}より蟹ころ
び落つ (五三頁)

晴日小閑

矢のごとく時たま翔^{かけ}る小鳥のかげ山すそに見えて晴天の風
(五五頁)

松風の下吹く椎のこもり風なほしさやげり雨はらら過ぎ
(五六頁)

雑木^{ざいふき}ふく風はしづもり松の風いやさや澄みぬ真間^{まま}の弘法寺^{くはふじ}
(五七頁)

浅夜

月明あかき浅夜の野良の家いくつ洋燈ランプつけたり馬鈴薯じゃがいもの花

(六一頁)

地靄たいひ立つ堆肥たいひの前の百合の花月の光に照らされにけり

(六二頁)

木槿むくげと雀そ

はらら来て雀そ逸れゆく木槿むくげ垣風がきか立ちたる花のうごくは

(九九頁)

時雨

いよよ寒く時雨しぐれ来る田の片明り後あとなる雁がまだわたる見

ゆ (一一八頁)

田家の冬枯

かきこそと掛^は稻^さの裾搔く稻雀陽^ひのまだ残る穂をくぐりつつ

(一二六頁)

野良の晩冬

曳かれ来てうしろ振り向く雄^をの牛^{うし}の一^{いち}眼^{がん}光る穂薄の風

(一二九頁)

蒲の穂

ほとほとに西日けうとくなりにけり雲がちな^がる蒲^まの穂^ほの立^{たち}

(一二九頁)

雀の宿雑詠

溜池に枯れし柳もしだれけりみ冬は小^ちさき不^ふ二^じのよく見ゆ

(一三一頁)

一色に枯れてわびしき庭ながら夕かげはひり深うかがよふ

(一三二頁)

ただ一つ庭には白しすべすべと嘗めつくしける犬の飯皿めしざら

(一三二頁)

池のべに枯れて声せぬ河柳かはやなぎちらとうごかす雀が白く

(一三二頁)

註、現代短歌全集には四句原作「お庭に白し」に還す。

夜のひかりはやごころらしほそり木の枯木の枝の交まじらふ見

れば (一三三頁)

ほとほとに障子ゆるがす羽音風雀はおとかぜなりけりかたぶき聴け

ば (一三六頁)

春の耕田

春浅み背戸の水田のさみどりの根芹は馬に食^たべられにけり

(一四六頁)

註、三句「さみどりの」は抑 の原作に還したのである。大正六年の「曼陀羅」創刊号所載。

虹の輪にひとしほ映ゆる早苗田の水田の遠の燈^{ともしび}火^{れつ}の列

(一四八頁)

現代短歌全集 『北原白秋集』 葛飾閑吟集

野ゆき山ゆき

鳩にほどり鳥かつしかをのの葛飾小野のゆふがすみねもごろあかし春もいぬら

む (四七頁)

蟹と竹

ささ蟹の音かき立つる竹の縁見のすがすがしひるい昼寝さめるる

(五三頁)

燕

燕つばめとまるただち揺れ立つ柳やなぎの枝つかのま水につきつつかへ反る

(五〇頁)

月夜よし厩えの空の枇杷の枝に啼く鶉えみて露しとどなる

(六三頁)

雨

揺れあがる一つ火蜋息つかししとどの雨か降り小止みたる

(六六頁)

良夜

月読の面おもてに近くさららめく青じゆずだまの秋風のこゑ

(一〇四頁)

庭前小情

白の猫庭の木賊とくさの日たむろに眼はほそめつつまだ現うつなり

(一〇二頁)

夕かげの木賊に移るちひ小蝶驚きて立ちてまた留りゐる

(一〇二頁)

霜の田

菱形に白く霜置く田の畔あぜのさむざむしもよ田にと続きて

(一一八頁)

霜しろき野田のはさ木のうしろ風馬は通へり尻に菰著て

(一一九頁)

新酒

鳩にほどり鳥の葛かつしか飾早稻かわせの新しぼり煮つつよろしき夜はさだまり

ぬ (一一五頁)

多雜詠

たまたまは障子にぬくむ日の色のうれしとを見れすぐかげ
るなり (一三五頁)

ただひとつお庭に白しすべすべと嘗なめつくしける犬の飯いひざ

皿ら

(一三二頁、還元)

夕虹

雨ふくむ槻のほづえの萌えちかく消ぬかの虹のまだ斜なる

(一四八頁)

雀の葛飾

飛ぶとしてしきり羽たたく雀の子声立てて還^{かへ}る若葉の揺れ

に (四五頁)

噴^{ふきあ}井^ゐべのあやめの下^{もと}のこぼれ水雀飲み居りかがやく水を

(五九頁)

とりどりに木の上^へにあそぶ雀子の思ひなげなる声の羨^としさ

(八三頁)

涼し涼し妻が盛りたる摺鉢の夏菊のなかに雀飛び入る
 (八六頁)

曠田の晩秋

風かざむき向に見えて羽ばたく稲雀さやぐ穂づらに分き吹かれつ
 つ (一〇八頁)

ちりぢりに雀吹かるる垂穂波風は入日の照り吹きあほる
 (一〇八頁)

秋ふかむ夕日明りや枯かれざさ小竹に雀羽ばたくこの閑しづけさを
 (一一〇頁)

枝にゐて一羽はのぞく庭の霜雀つらつら竝なみふくれつつ
 (一二〇頁)

刈小田に落穂よろこぶむら雀うしろ向けるが尾振りせはし
も (一二七頁)

むら雀しきり飛び立つ日の寒さほづえには赤き守柿ひとつ
(一三一頁)

古池に破れて影さす葭よしずがき簣垣今朝も寒そな雀が一羽 (一
三一頁)

池のべに枯れて声せぬ 河かはやなぎ柳 ちらとうごかす雀がしろく
(一三二頁)

むきむきに雀すぼまる木の梢は夕づき早し陽のかげりつつ
(一三四頁)

一羽出ていつかちらばるむら雀のち野路も寒みか尾にうごきつ

つ (一三九頁)

『花檜』 輪廻三鈔

護謨の葉

護謨ごむの木の畑はたの苗木の重き葉の大きなる葉の照りひびく
なり (一五九頁)

註、五句、「花檜」にては原作の「ふとひびらぎぬ」
に還す。

肉厚く重き護謨ごむの葉照り久しおのづからふかき息たてにけ
る (一五九頁)

嶋の日永

日は暑し夏の野のやし椰子の葉ずれより木高きものはあらしとぞ
思ふ (一五八頁)

別れ

うつし世のちよろづごとの誓かねごと言もむなしかりけりわかれ
去らしむ (一七三頁)

わが妻が別れに置きし一ひとこと言は真実まことなりけりよく聴きにけ
り (一七三頁)

これの世に家はなしとふ女をみなご子を突き放ちたりまた見ざる
外とに (一七三頁)

ほとほとに戸を去りあへず泣きにけり早や去りにけり日の

暮れにけり (一七四頁)

満月と鴉

眺むれば満月光に飛ぶ鴉一羽二羽三羽四羽五羽六羽 (一八五頁)

註、この五句は、以前の「地上巡礼」所載の原作に還したものである。

鴉飛びて朱あけの満月過ぎにけり鮮あざやかに見えつ太くちばしき嘴 (一八五頁)

註、但、後の改造文庫「花檉」再版にて、この三句は原作の「過ぎるとき」に還した。

良夜

円まどかなる月の光のいはれなくふと暗がりて来る夜ふけあり

(一八九頁)

月の夜の白き天あまぎり霧もくもくと流れて尽きず夜よあかり灯の上

(一八九頁)

発電機

真夏日の光はげしくた闇けにけり耳に入り来るダイナモ発電機の音

(一九二頁)

『花檉』 雀の卵

竹と山水

ひと色に黒くにじめる冬の山雨過ぎぬらし竹のみな靡く

(墨画を見て) (二〇五頁)

註、訂正前の原歌に還したのである。本は墨画を見ての作であつた。

閻魔の咳

冬の光しんかたるに真竹原閻魔大王の咳しはぶきとほる (二〇七頁)

山内の時雨

三縁山増上寺の朱の山門にふる時雨日がな日ぐらしふりにけるかも (二一三頁)

麻布十番

常青き堅木常盤木その葉落ちずいよいよ経れば霜下りにけり
(二一五頁)

白牛

吹雪やみて月夜明りとなりにけりおほに湧き起る牛の遠吼
(二二一頁)

路次の朝

硝子戸をさやに拭きこむこの朝明隣あさけの雪が眼の傍に見ゆ
(二二八頁)

雪煙ちらし蹴合けあへる組み雀ばと立ちたり庇まで来て
(二二九頁)

ほのかなる降りなりしかど椎の葉に一夜積みたる雪のうれ

しき (二二九頁)

夜明の鶴

嘴^{はし}ほそき鶴の一羽は見上げたり雪の気霧^{けき}らふ空の暗みを
(二三六頁)

春のめざめ

おのづから睡眠^{ねふり}さめ来るたまゆらはまだほのぼの^{わらはべ}し童^ごころ
(二九〇頁)

米飯

日に常に食^{たう}べ馴れつつ米の飯やうましとも思^もはね我^あも飽かぬかも
(二五三頁)

とり立てて味は香^かはなし米の飯ただ噛みしめていよよ知る

べし (二五四頁)

石版職工

人皆の眼まなこおどろき見てを居り人のひとりの描く花はな蓮はちす

(二五六頁)

ははそはのこれや我が母我がどちのこのよき母も老いまし
にけり (二六五頁)

貧しき食膳

葱のぬた食をしつつふともこの葱は硬き葱ぞと父の宣のらしつ
(二七〇頁)

母の深き吐息きくとき子の我や母のこころにひたと触りた
り (二七〇頁)

竹屋の木蓮

竹河岸の竹の櫓やぐらの春寒し細かに見ればその尖さきの揺れて

(二八八頁)

ひしひしと繁しみみ立てたれ竹の尖ほは突きぬけて寒し竝倉の上
に (二八九頁)

現代短歌全集 『北原白秋集』 雀の卵

吹雪の夜 (白牛)

吹雪やみて月夜明あかりとなりえにけりおほに湧き起る牛の太ふとぼ

吼え (二二二頁)

雪夜

いまだ起きて火だね守り^もあたりさらさらとあたりの沈黙^{しじ}に
雪のさやる音 (二二四頁)

石臼と杵

石臼と杵と真白き路次の奥あなさやけ今朝^{けさ}は一面の雪
(二三〇頁)

ふかぶかと雪盛り^もうづむ石の白杵の柄も外^{そと}に出てましろな
り (二三〇頁)

雀の短日

短日^{みじかび}の光つめたき小竹^{ささ}の葉に雨さるさると降りて来^きにけ
り (二〇八頁)

横しぐれ濡羽はららに寒竹の枝をたわめて飛ぶ雀かも

(二〇九頁)

春雑詠

しろもくれん
白木蓮の花の木の間まを飛ぶ雀遠くは行かね声のさびしさ

(二八六頁)

鴉のこゑ遠退ぞきゆけば雀のこゑ連れつつ明る雨霧の中

(二一三頁)

春の目ざめ

鐘鳴りて早やも子供の声すなりほのぼのしかも春の寝醒は

(二九〇頁)

朝めざめ朱墨つきたる掌てのひらなどしみじみと見つつ起きむとも

せず (二九〇頁)

南面趣

酒のまぬ人は窓から顔出してひめもす四方よもの雲眺めます

(二四四頁)

述懐

目を搔けば思ひかけずも火のごとき忘れしものしたたりにけり (二四七頁)

ははそはこのこれや我が母我がどちのこのよき母も老いましてにけり (二六五頁)

咽喉のどぼとけ母に剃らせてうつうつと眠ねぶりましたり父は口あ

けて (二六七頁)

垂乳根の深き溜息今もなほ耳にこもれり外をそといそげども

(二七一頁)

もの言はば涙ながれむこの父になにかあらがはむ父の子なるを (二七二頁)

麻布山

母と来て遊ぶ子供をながめこなたあつ此方ながめつ遊ぶ子供も
(二七五頁)

ある時

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲団をたたかれ
て (二七七頁)

右に就き附言したいことは、『花檉』は昭和三年十月改造社より刊行され、現代短歌全集『北原白秋集』は同四年九月同社より上梓された。で前ので訂正された歌は後のもさうなつてゐる。又、『花檉』は同五年に改造文庫の一冊として再版された。その時、初版に一二訂正を加へたのがある。

III 拾遺と新作とについて

『花檉』及び現代短歌全集『北原白秋集』編纂の際に、訂正作の外にそれぞれ往年の作から拾ひあげたのと、興を得て新作追補したのが少しばかりあり、『白秋全集』VI歌集二にも収めた。で、

こゝに摘録して置く。

「葛飾閑吟集」

蛍

雨の日のつめたき縁にほの光る蛍の骸はつまみ棄てたり

(現、新作)

曠田の晩秋

日のうちも寒き雀が枝にゐて膨れきらねば真顔かなしも

(現、拾遺)

月夜

山かげの真間の庵の白つつじにほへる妹と夜楽しめり

(花、新)

雨の頃

木の芽だつしもとゆりつつ鳴く声はまだいはけなき夏の百舌か

も (花、拾遺)

真間

むらさきのあやめ積藁むらすずめ農家の庭の麦扱こきの音

(現、拾遺)

雀の宿雑詠 二一

しきりなく寒けくあらし日向辺をすがふ雀の羽の音きけば

(新)

註、全集VIに、四句「すがふ子雀の」とあるは誤植。

ほとほとに障子ゆるがすはおとかぜ羽音風雀なりけりかたぶき聴け

ば (新)

夕べの虹

ひむがしに夕虹たちぬさやさやし笠ふり向けよさうとめ早少女がと

も (新)

「輪廻三鈔」

風懷

風高き椰子の葉末の月夜雲消けなば消けぬべし帰るすべなし

(花、新)

「雀の卵」

霜の夜声

この夜ごろ物の音ね冴えぬ 巷ちまた辺たべの夜霜よしもの凝こりか置き深むら
し (花、新)

吹雪の夜

へうとして何か夜よに呼ぶ声すなり巷ちまたの吹雪ふぶき闌ふけまさるらし

(現、新)

雀の短日

夕しぐれ間なくふりつぐ小竹ささの枝えに雀は久しすくみるにけり
 (訂正、拾遺)

南画趣

酒のます人はゆららに丸木橋わたりてゆかす瓢かつぎて
 (拾遺)

鷗外先生の庭

根府川の石のすがたぞおもしろき常なかりてふ沙羅の盛り
 を (新)

父母の歌

揺れやすき母の寢息の耳につきて背そがひには向けど愛かなし我が
 母よ (拾遺)

愛^{かな}しけく親と子とみて執る箸の朝の餉^けにすら笑ふすべなし

(拾遺)

麻布山

垂乳根と詣でて見れば麻布やま子供あそべり日のあたりよ

み (新)

母と来て遊ぶ子供をながめ^{こなた}るつ此方ながめつ遊ぶ子供も

(新)

借着

ひつたりと父のころもは身につきぬ常あらめやも父のかを

りの (新)

柳河の玩具

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青とに染められにけり

(新)

IV 全集補遺篇について

『白秋全集VI歌集第二』に於ては、更に補遺篇の中に「雀の卵時代」一章がある。当時の作で、『雀の卵』に洩れた作品を収録した。内訳をすれば

葛飾閑吟集

六十三首

但、内一首、「紫のあやめ積藁」の歌、『北原白秋集』と重複。

輪廻三鈔

四十二首

但、「眺むれば満月光に」の原作介入、重複。

雀の卵

百六十三首

総計二百六十八首である。で、二首差引き二百六十六首の補遺となる。諸雜誌及び「印度更紗」第一輯「真珠抄」に載つた作品である。

この内には、集の中の歌の原作であつたものが僅かながら入り交つてゐる。なほ、再査すれば捨てるでもなかつたと思へるものもいくらかは見当る。尤も大方はうち捨ててもよろしい。

しかし、之等は此の文庫版には収録を憚つた。参照したい方は全集に就いて鑑賞してほしい。

いづれ、之等は、決定版刊行の節に処理するつもりである。

青空文庫情報

底本：「白秋全集」岩波書店

1985（昭和60）年3月5日発行

底本の親本：「雀の卵」白秋文庫、アルス

1937（昭和12）年8月18日刊行

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

文庫版『雀の卵』覚書

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>